

子供たちに土の香を

—茨 城—

「これ何という花」ワラビって山で採れるの? 「キャーっ、へびよ、へびよ」ここ茨城県猿島郡岩井町の静かな田舎町は時ならぬ子供たちの叫び声や歓声で大騒ぎ。5月3日、浄国寺住職内手俊弘さん(50)の「都会の子供たちに土の香を」という呼びかけに約50名の都会っ子たちが集まりました。始めて見る草花に心を奪われ、林では時のたつのも忘れてワラビ採りを楽しみました。中でも子供たちに人気があったのが「タケノコがり」。お寺の裏山でニココ、ニココ顔を出し始めたタケノコを我れ先にと「退治」しにかかります。意外にも根を張ったタケノコにてこずった子供たち、そのうち、真ん中からポキンと折ってしまいました。終始にこやかに見守っていた内手さん、子供たちはこの現代版「良寛さま」のもとで楽しい一日を過ごしました。

沖縄は還えるのだが

沖縄返還協定調印を間近にひかえて、4月28日、沖縄デーは盛りあがりを見せていた。沖縄復帰協議会の代表団も上京し、社会党共産党共闘の中央集会で訴えた。K君23歳。沖縄出身。活動家。彼は、これまでの沖縄闘争や、行事化してしまった4.28沖縄デーに何かふっさけないものを感じている。しかし、それでも闘わなければならないのだという声が体の中を駆けめぐる。返還協定は沖縄ではなく、本土・東京で調印される。沖縄での闘いと連帯して東京で闘わなければならない。だが、連帯した闘いとは? 彼は4月28日、日比谷公園での集会で演説した。「問われているのはまさしく本土であり……」調印がもたらすものは施政権が日本に移行するにすぎない。沖縄は変わりはない。決して沖縄の巨大な犠牲は報われはしない。沖縄が基地の町として存在する限り、その犯罪性は追求されなければならない。彼は確信をもってデモ隊を見守っていた。同じ夜、Kさんは新宿のある店で、酔客相手のサービスとして沖縄の民謡を踊っていた。彼女は酔客の目に差別を感じたことが何度かある。沖縄から本土に働きにきて、殺人を犯したり、自殺した少年達。傷つき、虚しく沖縄へ戻っていった人達を多く知っている。「それでも沖縄は変わらない。沖縄が受けた痛みは消えはしない」。こみあげてくるもの、突きあげてくるものを押しかくしながら踊り続ける彼女。「負けてはならない。ここで沖縄へ帰ることはもっと惨めなことなのだ」沖縄は還ってくるのだが、未だ多くの還ってこないものを沖縄は告発している。